



かんじょうつり 野洲の勸請吊

「^{かんじょうつり}勸請吊」は、年の始めに大注連縄をつくり、ムラの境や神社の境内に懸ける行事です。近畿地方を中心にその分布がみられ、特に大和・山城・伊賀・若狭そして近江に多く伝えられています。

この行事は、神仏を迎え、ムラの外から悪いものが入ってこないように、村中安全や五穀豊穡などを祈るものであるといわれています。ムラの入口に道切りとして縄がかけられるのは「勸請」の意をよく表しているといえるでしょう。また、縄を「^{じやなわ}蛇縄」と呼んだり、川の分岐点に、あるいは川をわたして懸けられることもあり、水に対する信仰や、用水の権利などとのかかわりを表しているとも考えられています。

縄の形は、いわゆる注連縄とは区別され、ムラごとに特色あるつくり方が伝えられています。よくみられるものとしては、中央に輪のようなものや魔除けの呪文を書いた板を吊るすものがあります。また、縄に刺して立てる御幣や下げられる細い縄は、平年は12本、^{うるうとし}閏年は13本と、1年を表しています。

勸請吊は、縄をつくり懸けるのみの行事ではなく、オコナイや^{しんじ}神事、また山の神や野神などの行事のなかで行われることが多いようです。また、集まったムラの人々が、神仏に祈り、共に酒を飲み会食する「^{なごらい}直会」の場があります。まさに、年の始めに、一年の無事を祈り願う意味がこめられた行事であるといえるでしょう。



野洲町富波甲の勸請吊

富波甲の勸請吊

野洲町大字富波甲では、1月8日（現在は8日に近い日曜日）に勸請吊が行われます。地元ではこの行事を「鳥帽子着神事」「花作りの神事」、また「銀堂神事」とも呼んでいます。この行事をつとめるのは、富波甲のなかでも天台宗常楽寺（銀堂）の信徒12戸の「郷士仲間」に限られています。

1月8日の朝、郷士仲間が羽織袴を着用し、常楽寺に参集します。各戸からわらを1束ずつ集め、これで大注連縄をないます。

縄は、三ツ縄、左ないで、太さ10センチ、長さ10メートル余もある大きなもので、堂の柱や梁にかけて送りながら、3人がかりで掛け声とともになっています。昔から、縄の長さは測るのではなく、堂の柱などを目安につくられてきました。

また、細縄にカナギの枝を3か所にしばり白紙の幣をつけたアシ（足）を、平年は12本、閏年は13本、縄にくくり下げます。そして、青竹の串に三角の白紙をはさんで御幣のような形にしたウロコを、縄の背に平年は12本、閏年は13本刺して立てます。中央には、カナギの枝を平年は12本、閏年は13本の縄でくくって⊗形にしたタマ（玉）をつるします。

この大注連縄をジャナワ（蛇縄）といい、ジャが中央の玉を抱いた形につくったものであると伝えられています。

ジャナワができると、堂内で直会が行われます。当番が用意した豆腐の煮たものと、輪切りのたくあんを酒を飲み、会食します。直会が続き、しばらくすると、長老の「サギチョウエー！」の声とともに一同が席を立って、ジャナワをかつぎ、田の畦道を通ってムラの乾（西北）にある中の池川の堤へ向かいます。ここにある松の木（現在はコンクリート柱）にジャナワを懸けるのです。この場所は、常楽寺の西門跡であると伝えられています。

縄を懸け終わると、残ったわらや竹、去年のジャナワを前で燃やして左義長をします。



ジャナワをつくる



タマをつくる



堂内での直会



ジャナワを吊るす

青竹は、勢いのいい大きな音をたてて鳴りひびく、爆竹です。

このあと、ヤド（宿・当番の家）に集まり、再び一同が着座して直会が行われます。

この行事はいくつかの呼び方がされていますが、行事を構成する要素を表していると考えられます。「烏帽子着神事」というのは、以前は15歳で元服する時に烏帽子をかぶり神事をつとめたといわれ、これが今でいう成人となる儀式であったという伝承があります。また、「花作りの神事」というのは、勧請吊をつくることを古くは「花作り」といったと考えられます。

常楽寺は、現在、「銀堂」とよばれる堂と境内の一部を残していますが、もとはいくつもの伽藍をもつ大きな寺院であったといえます。この行事を「銀堂神事」ともいい、つとめるのが信徒の郷士仲間に限られるのも、寺の行事であることを意味しているのでしょう。

郷士仲間には、宝暦10年（1760）の「烏帽



吊られたジャナワ



当番宅での直会



富波乙十八講御弓講の弓射



富波乙の勧請吊

しんじしきもくちよう
子神事式目帳」が伝えられており、神事の由来や行事内容のあらましが記されています。この記録は、行事内容の改正時にまとめられたと思われ、料理品目や当番の組み合わせなどもみられ、仲間の戸数が現在よりも多かったこともわかります。勧請吊についても、1月8日に常楽寺に集まってつくり西門跡に納めることが記されており、古くからこの行事が伝えられてきたことを示しています。

野洲町に伝えられる勧請吊

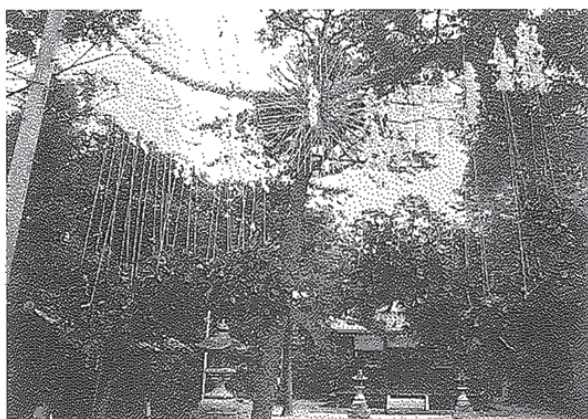
野洲町には、富波甲のほか、^{とばおつ つじまち}富波乙・辻町・^{いちみやけ}市三宅・^{ゆきはた}行畑・^{やす}野洲の5つのムラに勧請吊の行事が伝えられています。

この分布をみると、「山の神」の行事が山側のムラで多く行われているのに対して、勧請吊は平野部のムラにみられ、山の神と勧請吊の両方の行事があるのは辻町のみとなっています。共に農村の正月行事ですが、分布の上で違いがあらわれています。

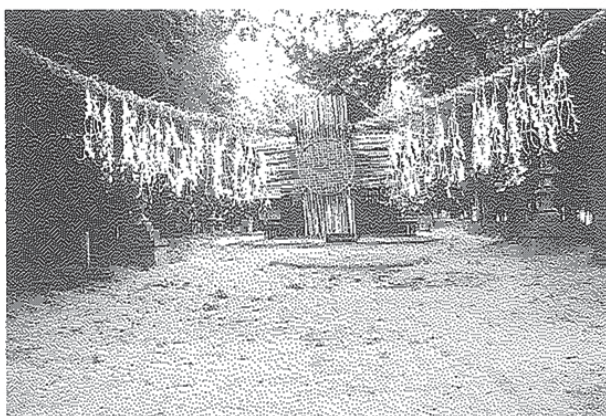
行事の日は、ムラにより異なり、富波乙は



辻町の勧請吊



行畑の勧請吊



市三宅の勧請吊



野洲の勧請吊

3日、行畑は8日、野洲は10日、辻町は14日、市三宅は19日となっています。縄のつくり方も各々に特色ある形を伝えています。野洲町の6つのムラに共通してみられるのは、中央に木の枝や竹でつくった輪や十文字の形をしたものを下げています。悪いものが入ってこないようにという意味を象徴的に表しているといえるでしょう。

縄を懸ける場所は、富波乙ではムラに2か所ある「勧請門」^{かんじょうもん}とよばれる所に決まっています。他の4つのムラでは、神社の鳥居を入った参道の途中の木に懸けられます。富波甲や富波乙のように集落の入口などに懸けられる姿が古い形を伝えていると考えられるでしょう。

また、勧請吊の行事は縄をつくり懸けるだけでなく他の行事と共に行われています。

富波乙では、十八講御弓講^{じゅうはっこうおゆみこう}の講員が勧請吊を行います。1月3日に当番の家で縄をつくり、2か所に懸けます。そのあと、当番の家の庭に的をしつらえ、講員が順番に弓を射ます。この弓射は、昔は18日に、袴^{かみしも}を着用し、神塚山（亀塚古墳）で行われたといわれています。

野洲では「オコナイ」、行畑では「初寄り^{はつよ}」といって、勧請吊のあと、ムラの人たちが集まって直会があります。ムラの新年会があわせて行なわれるのです。このように、勧請吊は、ムラ独自の様々な行事のなかで行われています。

勧請吊などの年中行事^{ねんちゅうぎょうじ}は、古文書などに記録されることが少なく、いつごろから始められたかもはっきりしません。しかし、古くから世代から世代へと行事の場でひとつひとつ伝承されてきたものなのです。くらしのなかで伝えられてきた民俗は、私たちが目にするのできるムラの歴史の生きた姿なのかもしれません。

〔行俊 勉 氏
野洲町立歴史民俗資料館 写真提供〕